

Title	表紙ほか
Author(s)	
Citation	防虫科学 (1942), 6
Issue Date	1942-12
URL	http://hdl.handle.net/2433/156479
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

防蟲科學

第 六 號

財團法人防蟲科學研究所

京 都 帝 國 大 學 內

昭 和 十 七 年 十 二 月

目 次

論 說

羊毛重要害蟲「ヒメマルカツラブシムシ」の天敵

「キアシアリガタバチ」に就きて (第一報). 京都帝國大學農學部
昆蟲學研究室 山田 保治… 1

「シミ」の蝕害と、「ス・フ」、和紙、「モスリン」

との關係 同 山田 保治…24

「シミ」に對する、柿澁の防蟲效果に就きて

同 山田 保治…35

毛織物の害蟲「シモフリマルカツラブシムシ」幼

蟲の脱皮回数に就きて 同 山田 保治…41

通俗防蟲科學

南京蟲の話

同 山田 保治…45

編輯後記

財團法人防蟲科學研究所總則及役員

編 輯 後 記

古來、「衣食足りて禮節を知る」と言はれて居る。此言葉の眞意がわかつて居たならば、闇は無いはず。從來、吾々の生活があまりにも恵まれ過ぎて居た、と同時に、無駄が多過ぎて居たことを、今更らながら痛感させられる。無駄程、生活を墮落せしめるものはない。國家總力戰に對する、心構への、最も大切な要素の一つは、無駄を無くすることにある。

毛織物や木綿が、「スフ」に置き變へられて、始めて、羊毛の有難さを知り、今まで木綿を粗末にして居たことに気がつく。「後悔先に立たず」とは此事で、全く無駄がまねいた悔である。

吾々の生活に、一日も缺くことの出来ない御米、此米が、小さな穀象のために、年々數千萬圓に價する分を食べられてしまふ。其穀象退治に、珪藻土を用ひて、簡単に防除出来る、武居宮島兩氏の研究も、着々として進められて居る。又、藁灰が、穀象退治に、効果のあることは本誌第五號の本欄に書いて置いた。此事を、余が郷里、福井在の老農に話した處。昔は米を精白する際、藁灰を混ぜて搗き、其儘、灰を取り去らないで、俵に入れて、釣して置いたもので、さうして置くと、穀象の被害は、絶対に無かつたものだ、と、米壽に近い、其老人から聞かされた。經驗が、「柿澁の場合と同様に」貴とい學問であることを教へられた。

研究は、あらゆる角度から進めなければならぬ。従つて、之れが完成には、相當の時日を要する。然れども、依つて得た結論は、出来得るだけ簡易を要する。其所に科學の力の有難さがある。

大切な、衣食に對する害蟲の被害を、如何にして防除するかは、吾々に與へられた大きな使命である。此恵まれた仕事に對し、いさゝかなりとも、御奉公が出来ればと、之れを希ひながら、喜びを、感謝に滿ちつゝ、歩を進めて居る。

谷口久代氏の退職

昭和12年、防蟲科學研究所創設以來、今年に到るまで、6年の長きに亙り、専ら、被服害蟲と其防除に關する、調査研究補助員として、勤務せられし谷口久代氏は、新家庭に入らるゝため、今春4月を以て退職せられた。其間残されし業績の一部は、既に本誌に登載せられ讀者の熟知せらるゝ處。同氏が永年盡くされし功績に對し、深甚なる謝意を表すると共に、氏の將來に對し、衷心多幸を祈つて止まぬ。

(山田保治記)